

## 資 料

### 5歳女兒と家族のインタラクション

Interaction Between Five Year Old Girl and Family

門脇千恵<sup>1)</sup>, 佐々木和義<sup>5)</sup>, 桂川泰典<sup>6)</sup>, 齋藤啓子<sup>2)</sup>  
森田智子<sup>3)</sup>, 西垣里志<sup>4)</sup>, 曾我部美恵子<sup>1)</sup>

1) 関西看護医療大学 看護学部 母性看護・助産学

2) 関西看護医療大学 看護学部 小児看護学

3) 関西看護医療大学 看護学部 地域看護学

4) 前関西看護医療大学 看護学部 精神看護学

5) 早稲田大学

6) 岡山大学

Chie Kadowaki, kazuyoshi Sasaki, Taisuke Katsuragawa, Hiroko Saito,  
Tomoko Morita, Satoshi Nishigaki, Mieko Sokabe

1) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Maternity Nursing & Midwifery

2) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Child Health Nursing

3) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Community Health Nursing

4) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Faculty of Nursing, Psychiatric Nursing.(previous job)

5) Waseda University

6) Okayama University

**要旨：**【目的】5歳女兒の健常発達を示す幼児を対象として，1対1の遊び場面とおやつ場面を設定して，親子の相互作用の様相を把握し，自閉症スペクトラム障害児の親子場面で社会的相互作用の問題点を把握するための指標を検討する。【方法】遊び場面とおやつ場面を家庭用ビデオカメラで撮影し，3分間観察をし，行動の出現頻度を数えた。【結果】遊び場面では，アイコンタクトが6回，ターンテッキングが6回，共同注視が7回，話しかけが11回，見せる行動が7回，微笑みかけが6回，および身体接触が0回出現した。おやつ場面では，アイコンタクトが7回，ターンテッキングが7回，共同注視が5回，話しかけが7回，見せる行動が4回，微笑みかけが4回，および身体接触が0回出現した。【考察】選定した行動は，身体接触以外は，幼児の対人相互作用を把握する妥当な指標と考えられる。また日常場面における簡便な観察方法を確認することができた。2台の研究用ビデオカメラを用いて対面し，相互作用をする2者を同期させてデータを得るという高価な方法を取らなくても，長椅子に隣り合って座らせることによって，家庭用のビデオカメラでデータを得られるということが示唆され，親子関係，保育士子ども関係，きょうだい関係，および仲間関係を，把握する道を開いた可能性がある。

**キーワード：**親子関係，ビデオ観察，相互作用，自閉症スペクトラム障害 (ASD)

**Keywords：**parent-child relations, video observation, interpersonal interactions, Autism Spectrum Disorder (ASD)

## I. 研究の背景と目的

近年、子どもや家庭をめぐる問題が複雑・多様化し育児不安や育児困難、その延長線上に虐待など多くの社会問題が生じている。育児不安や育児困難の要因として富岡ら（2005）は、育児支援に関する研究の動向と今後の課題を明らかにすることを目的として医中誌Webを用いて文献検索を行った。62件の研究内容を検討した結果、「乳幼児をもつ親への育児支援に関する研究」、「ハイリスクな母子への育児支援に関する研究」、「働く母親への育児支援に関する研究」、「育児に対する親の態度・意識調査」、および「育児支援の実践報告・活動評価」の5つに分類された。さらに、今後の課題として、「家族内サポートを高めるための方法の検討」、「育児不安・育児困難を潜在的に抱える母親への対応」、「働く母親とその家族を支援する社会サービスの検討」、および「多様化するニーズに対応するための各機関の連携や支援方法・内容の検討」を提言している。また、樋口ら（2004）は、子どもへの虐待のハイリスク要因として、望まない妊娠、育てにくい子、子育て上の心配、子どものけが・やけどの多さ、母親の健康状態の悪さ、夫婦仲の不良、相談相手のなさ、健診での相談できなさなどの背景要因があると指摘し、それが虐待行為の多さやネグレクトにつながると報告している。したがって、子育て支援については、多方面より検討していく必要がある。

看護系文献では、育児不安や育児困難については、ほとんどのものが親、家族、および社会を中心としたものであり、子どもや親子の相互作用に視点をあてた文献は見当たらなかった。それは、乳幼児の研究は、親からの情報が中心で子ども自体の反応が把握できないからである。

育てにくい子どもの中には、身体障害、知的障害、あるいは注意欠陥多動性障害（ADHD）や自閉症スペクトラム障害（autism spectrum disorder：ASD）を含む発達障害などをもつ子どもが含まれていると考えられる。中でもASDは幼児期では鑑別が困難である。従来、ASDの概念に関しては、自閉性障害とアスペルガー障害は広汎性発達障害のなかの別カテゴリーであった（アメリカ精神医学学会、2000）が、Baron-Cohen（2011）は健常発達までスペクトラムにあ

ることを提唱した。現在ではそれが広く支持され、ASDは、社会的コミュニケーションと相互作用における継続的な障害と、限定し反復した行動・興味・活動とを特徴とする生得的な脳機能障害とと考えられている（アメリカ精神医学学会、2013）。Tony Attwood（2012）は、ASDが認知されて50年以上経った今でもその本質についてわからない点が多く、彼らが示す偏った行動のすべてを包括的に説明ができないため、親たちからの質問にも簡単に説明できないのが現状であると困難点を述べている。しかし、幼児期から障害の有無を適切に判断し、適切な養育と教育が重要と考えられる。

わが国の制度ではスクリーニングの機会は、最初が健診場面であり、次が保育所である。そこでの社会的コミュニケーションと相互作用のあり方を簡便に把握することが必要になる。場面としては、親子関係、保育士子ども関係、あるいはきょうだい関係が考えられる。幼児期のASD児の社会的相互作用の問題点を把握するためには、乳児の社会化に重要な社会的微笑、話しかけ、アイコンタクト、ターンテッキング、共同注視、関心事の共有（見せるなど）、および身体接触（高橋1990）の様相と比較することが必要である。

今回は、健常発達の幼児を対象として、1対1の遊び場面とおやつ場面を設定して、親子の相互作用の様相を把握し、ASD児の親子場面で社会的相互作用の問題点を把握するための指標を検討する。

## II. 研究方法

### 1. 研究対象者

関東圏内に居住する女兒1名（5歳）とその父親（30歳代前半）。女兒は普段から活発で、話好きで家族との関係性も良い状況であり、父親は女兒の面倒をよく見る関係であった。また、臨床心理士、学校心理士、発達心理士の認定資格を持つ共同研究者は、心理学に基づき、女兒が使用している言語、遊び、呼びかけへの反応、一人でのときの行動、研究者らとの関係、父親との相互作用を注意深く観察した結果、女兒が正常発達していると判断した。

### 2. 研究期間

平成25年3月～平成25年8月22日

### 3. 実施場所

親子の相互作用のビデオ撮影は関東圏内のA大学の研究室で行い、ビデオ映像の分析は関西圏内のB大学の研究室で実施した。

### 4. 手続き

1) **ビデオ撮影**：親子は並んで長椅子に座り、お互いが見合えるように設定した。テーブルの上に置いた遊具で遊ぶ場面と、おやつを食べる場面を、三脚に家庭用ビデオカメラを固定し、数メートル離れた位置からビデオ撮影を行った。2者の対面場面を別のカメラで同期させて撮影しなかったのは、日常の健診場面や療育場面では簡便ではなく、またアイコンタクトの様相は把握できないからである。

できるだけ自然な親子の相互作用を撮影するために、日頃愛用しているおもちゃ（絵本）とおやつを持参してもらった。撮影は各々の場面を10分の目安で、連続して約20分間行った。遊具とおやつは、親子の目の前のテーブルに乗せられた。

2) **データ分析**：小児看護学、精神看護学の研究者2名が、B大学の研究室において、録画ビデオを繰り返し再生して、親子の相互作用がみられる行動を独立でカウントし、不一致については行動の定義について協議を行った。観察項目の選定は、ASDを持つ子どもとその家族に関する研究者であり、臨床心理士、学校心理士、および臨床発達心理士の資格を持つ共著者が主となってDSMの例示に沿って選定した。

アイコンタクト、微笑みかけ、および身体接触が対人関係を調整する多彩な非言語的行動として選定され、ものを見せる行動と共同注視とが楽しみや興味の共有を示す行動として選定され、話しかけとターンティングとが会話を開始して維持する行動として選定された。ターンティングは二人の間で互いに順番をとることであり、乳児期には母子間のアイコンタクトと吸啜反応にみられる。今回は(1)親からの話しかけを開始とする子どもの反応(相手を見ること、発声、および微笑)、それに対する親の反応と、(2)子どもからの発声・微笑みかけを開始とする親の応答、それに対する子どもの微笑みとした。遊びの場面では絵本を開

いてから、おやつの場面では親が手渡してから、それぞれ3分間観察を行った。

### 5. 倫理的配慮

家族には撮影前に研究趣旨と匿名化とを説明し、さらに本研究で録画した場面は保護者との楽しい日常場面であり、ビデオ撮影は日常の行事の中で通常に行われており、心理的侵襲性はないことを子どもと保護者に説明をした。さらに、同意を得られた場合でも公表されるまではいつでも撤回できることを説明し、同意が得られた。なお本研究は関西看護医療大学研究倫理審査委員会において承認を得ている。

## III. 結果

1. 遊びの場面では、アイコンタクトが6回、ターンティングが6回、共同注視が7回、話しかけが11回、見せる行動が7回、微笑みかけが6回、および身体接触が0回出現した。食事場面では、アイコンタクトが7回、ターンティングが7回、共同注視が5回、話しかけが7回、見せる行動が4回、微笑みかけが4回、および身体接触が0回出現した。両場面での各行動の出現頻度には有意な差は認められなかった。また、身体接触は両場面とも0回であったが、他の行動については、場面内の出現頻度にも有意な差は見られなかった。

## IV. 考察

本研究については、一事例であったのでそのまま一般化することはできないが、多少活発な幼児であったことを考慮すると、健常発達幼児の対人行動のあり方の一定の目安を提供したと言えよう。また、今回選定した場面は就学前の幼児にとっては極めて日常的な場面であるが、2場面間で対人行動の出現に差がなかったということは、幼児の対人行動を把握する場面として適切な場面であることが期待される。しかし、身体接触は全く出現せずに、幼児期の対人行動の指標としては不適切と考えられる。さらに、選定した行動は、身体接触以外には、臨床的妥当性を満たしていたと考えられる。

2台のビデオカメラを用いて対面して相互作用をする2者を同期させてデータを得るという高価

な方法を取らなくても長椅子に隣り合って座らせることによって、かつ家庭用のビデオカメラでデータを得ることが示唆され、親子関係、保育士子ども関係、きょうだい関係、および仲間関係を、把握する道を開いた可能性がある。

## V. 今後の課題

今回は家庭用ビデオ機器を用いて、長椅子に親子が並んで座って、目の前のテーブルに道具が置かれるという設定で、撮影をしたのであるが、両者の相互作用を十分に把握することができた。したがって、保護者が簡単に自宅で撮影をして、専門家に相談する時の判断材料として用いる可能性を保証しており、今回の試みは有意義であったと考えられる。

本研究者は、保育師、幼稚園教諭、保健師、および地域で子どもに関わっている人たちを対象として、平成24年3月、6月、および平成25年8月に「大学から地域へ発信する子育て支援」と題して乳幼児期のASD児の特性と具体的な対応方法について公開講座を行ってきた。参加者の中から、望ましくない行動をとる子どもが増えてきているという意見が聞かれる。受講後の質問の中で、その時どのような対応をして良いか分からないという意見や相談が少なからずみられた。現状では就学前では十分な評価と対応がなされておらず、小学校入学後によりやく個々に応じた対応が行われている。発達障害は、発生頻度が高いだけでなく、早期介入により予後が良くなる可能性が示唆されている（稲田尚子ら：2012）ため、ますます早期スクリーニングの必要性がある。加藤正仁ら（2011）は子どもの将来の自立に向けた発達支援、家族を含めたトータルな支援、子どものライフステージに応じた一貫した支援、できるだけ子ども・家族にとって身近な地域における支援をする必要があると述べている。また、乳幼児期、学齢期、成人期に移っていく子どものライフステージに応じて、医療・保健・福祉・教育などの関係機関が連携して支援していくことが重要である。しかし、その取り組みが就学前においてはうまく機能していないのも現実である。

ASD幼児の対人行動の対照群（健常発達群）のデータを得るために、当初は保育士・保育園児

間の対人行動を撮影する計画であり、保育園には事前に研究の趣旨を説明し、快諾を得ていたが、問題点を明確にすることへの強い懸念が職員の中にあり、保護者の同意の段階にいたらず、ビデオ撮影は困難な状況になった。そのため知人の紹介を得て健常発達の子5歳児2名の親子の相互作用場面の撮影を行ったが、1名は撮影スタッフとの相互作用が混入してしまい、1事例のみの報告となった。データ収集の難しさ、および看護分野にどのように生かしていくのかの難しさを再確認した。今後も研修会などを予定しており、地域との密接な関係作りから連携体制作りを図ることで、健康発達児における親子や保育師・園児などの相互作用や、ASDが疑われる子どもにおける相互作用のデータを取得し、解析に努めていく。それによって幼児期での評価方法を明らかにすることができ、ASD児童へのプログラムを幼児期にも適用することができ、ASD幼児がより混乱が少なく保育園や幼稚園で過ごすことへとつながっていくと考えられる。

## 付記

本研究は、平成24年度～25年度科学研究費補助金（挑戦的萌芽研究／（課題番号24660027・研究代表者；門脇千恵）による。

## 参考文献

- American Psychiatric Association (2000): *Diagnostic and statistical manual of mental disorders* (4th ed., text revision). Washington, DC/アメリカ精神医学会 (2002) 高橋三郎, 大野裕, 染谷俊幸訳: DSM-IV-TR精神疾患の分類と診断の手引き新訂版 医学書院, 東京.
- American Psychiatric Association (2013): *Diagnostic and Statistical manual of Mental Disorders*, 5th ed.: DSM-V. Washington, DC.
- Baron Cohen, S. (2008): *Autism and Asperger Syndrome*, The Facts, Oxford University Press, England./サイモン・バロン＝コーエン著 (2011); 水野薫, 鳥居深雪, 岡田智訳: 自閉症スペクトラム入門 脳・心理から教育・治療までの最新知識, pp.1-70, 中央法規出版,

- 東京.  
一般社団法人 日本発達障害ネットワーク (JDD  
ネット) 編 (2012): 明石書店, 東京.  
市川宏伸, 内山都紀夫編著 (2012): 発達障害  
早めの気づきとその対応, pp.1-23, 中外医学社,  
東京.  
樋口広美, 坪川トモ子, 高橋裕子他 (2004): 育  
児実態調査から見た虐待のハイリスク要因 子  
ども虐待を早期発見・予防のために, 保健師ジャー  
ナル, 60(10), pp.1006-1013.  
加藤正仁, 宮田広善監修 (2011): 発達支援学そ  
の理論と実践 育ちが気になる子の子育て支援,  
pp.11-19, 協同医書出版社, 東京.  
Tony Attwood (1998): *Asperger's syndrome,  
A guide for parents and professionals*,  
London, Jessica Kingsley.  
トニー・アトウッド (2012)/内山都紀夫監訳:  
アトウッド博士の自閉症スペクトラム障害の子  
どもの理解と支援, pp.7-40, 明石書店, 東京.  
高橋道子 (1990): 乳児の認知と社会化 無藤隆・  
高橋恵子・田島元信 (編) 発達心理学1: 乳児・  
幼児・児童, pp.36-60, 東京大学出版会, 東京.  
富岡晶子・前田留美・新町豊子 (2005): 育児支  
援に関する研究の動向と課題, 川崎市立看護短  
期大学紀要, 10(1), pp.1-10.